

新勅撰上

122

庫 文 閣 内			
二 口 函	四 三 三 二	二 冊	和 書
九 架	二 冊	二 號	類

内 閣 文 庫	
番 號	和 43322
冊 數	2 (1)
函 號	200122

200-122

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



[Faint, illegible handwritten text, likely bleed-through from the reverse side. The text appears to be in a cursive script.]

[Blank page with visible paper texture and some minor staining.]

500-153

新刊撰和歌集

すしきみえとてつてうをいふりてり
小のなほとうあやえとていふりてり
成算文庫



しりしりけりまゐりてせうはのみきせり
はつとつといんゆり古今後撰わりの集
みあすにはやうとていふりてあつた
そらされうあやうじうといひ今やいひ
る若かりきこいといふのやうに
めうといふ方月ふすといふはうに



の事とていふはうにいふらめとては
はつとつといんゆり古今後撰わりの集
みあすにはやうとていふりてあつた
そらされうあやうじうといひ今やいひ
る若かりきこいといふのやうに
めうといふ方月ふすといふはうに

にさ寛秋系付にさる一とにさる也
 津路又さる小にさるむあつひのさる
 むさる也さる延天曆のじ一
 かり民のさるこ一とさる
 小あさ又寛喜貞永のじ一
 人金とさるむさる系とさる
 じさる一とさる小あはさる
 定家とさる松のじ一
 うさる一とさるさるさる

志願の位成き、まてきも、此の成、固てみり
 いまの、此、事、を、う、まてき、も、い、此、う、う、に、成、成、
 とも、う、時、ふ、あ、ひ、て、あ、う、り、成、う、あ、と、を、に、人
 ありき、此、あ、り、を、い、う、ふ、成、い、此、せ、と、う
 金、い、成、う、ふ、も、り、て、春、夏、秋、冬、に、ア、ア、
 とも、系、と、け、め、き、の、御、成、を、い、ひ、と、ま、
 ア、人、の、系、と、い、は、先、と、こ、う、ひ、神、成、う、や、ま、い、
 う、め、の、系、を、う、い、は、ま、と、い、い、身、の、成、ひ、を、
 れ、ま、て、う、ま、て、部、成、の、成、成、を、ま、て
 え、い、う、真、砂、の、子、く、う、う、成、う、ま、も、か、き、

あつひろく 貞永元年十月二日あけ
替ういふあて新勅撰和歌集とあふ
ふとさる

新撰和歌集卷第一

春平上

うらやのこもさうけうらめしき
ふかきけうらめしき

御製

めづる年もさうてき春のあけ
きふきのあけ

皇太后宮人史俊成

ふのふけのうらめしき
ちきり

延喜七年二月内河原風ふえの

あまの目 紀貫之

ふもあけのうらめしき
あけ

あけのうらめしき

あけのうらめしき
あけ

あけのうらめしき

あけのうらめしき

あけのうらめしき

あけのうらめしき

あけのうらめしき

三條右大臣家屏風

貫之

ふんもき宿あまをくうきふひつるまに
法性寺入道前判白の家と十首方
しつるふ高とよめ

権中納言師俊

高のつらふに宿あまのきふひつるまに
うくひと春とけくとくはげふしつる

源俊賴朝臣

えうとあにきく高のつらふに宿あまのきふひつるまに

久安の年崇徳院より百首あまのきふひつるまに

まのきふひつるまに宿あまのきふひつるまに
待賢門院朝臣

おかしめふきく高のつらふに宿あまのきふひつるまに
亦恭議親王

おかしめふきく高のつらふに宿あまのきふひつるまに

後徳大寺左大臣十首あまのきふひつるまに
遠村殿といふはつるまに宿あまのきふひつるまに

皇太子宮中俊成

おかしめふきく高のつらふに宿あまのきふひつるまに
守實法親王家より五十首あまのきふひつるまに

春平

寛延法師

住持のありともよしと遠里小蛇しきる

源師亮

いふ端もなすいふよしとてちかきふしやうまう

百首あり 或は旧親王

にふ海やあはれにふ舟のまゝもまじりて

後京極攝政たる将も侍人なり時白き

ふ世のふふ 八條院の系

月あてあしる物ふれふ横をいふるもの

ふふ 勇祐好忠

ふ

ふふのふれふとふふのふれふとふふ

ふふのふれふとふふのふれふとふふ

ふふのふれふとふふのふれふとふふ

ふふのふれふとふふのふれふとふふ

ふふのふれふとふふのふれふとふふ

ふふのふれふとふふのふれふとふふ

柳とふふのふれふとふふのふれふとふふ

ふふのふれふとふふのふれふとふふ

ふふのふれふとふふのふれふとふふ

大暦御時山屏風

中務

吹風はるれ也岸の青柳をいづはるる道はありき
千五百番所合

二條院讃岐

百あやうさこのまうか斗てうましく青柳系

春あまのつるふ

梅系後

ういふてこはもしいまの吹くまはる青柳の

寛喜元年十一月廿四日屏風に

人柳をいづはる

目次

ういふてせきまのういふ風も枝とあはる青柳

正三位家

いふてせきまのういふ風も枝とあはる青柳

春あまのつるふ

鎌倉右大臣

いふてせきまのういふ風も枝とあはる青柳

いふてせきまのういふ風も枝とあはる青柳

梅の花とあはる中務のいづはる

九條右大臣

花もあふれし梅と云ぬまふふ
けりし梅と云ふもめづる

いと懐良

春をいづく宿の梅にひとりやうやう
顔ふ

凡河内躬恒

うきうきと梅に梅にうきうきと梅に

男之

山吹をよめてやじめのももろもろのうき

亭子院の合

坂と見

さつこのうきうきと梅のうきうき

顔ふ 或子内親王

うきうきと梅に梅にうきうきと梅に

信人内家良

うきうきと梅に梅にうきうきと梅に

教富内院大輔

うきうきと梅に梅にうきうきと梅に

正之位家隆

うきうきと梅に梅にうきうきと梅に

春をいづく

後京極權近太子

親波津之やじし梅もこもまがらう海風を

守覚は親王家九十有年と傳ふ

覚延法師

去る月のしや思ひあはるけのちも梅

皇太子後

梅も身にしはる昔そへてあはる月の

も陽院の梅をとりてつる梅

大貳之位

いふはこれの元なるふ死る言とす

片

宇治前関白太政大臣

そがはあきし梅もこもあはる月の

家百有年と梅といふは

前関白

梅もあはる月のしはる昔そへてあはる月の

後京極權近家の孫合め

ゆゑ

正秋の院丹後

春の風のしはる月のしはる昔そへてあはる月の

白きあはる月のしはる昔そへてあはる月の

権中納言時

人細書師氏

亦大德資賢

友人志

中興言家咸得合一得多少心寒花

遅と云ふは、
心越えてつ
けぬ

友原基俊

題志

修隱史頌

わしやく本の女表紙などに花の被ふふり

檟中細玄長方

花山ふもゝあふみ。此、花野の山家の庭

寛治七年三月十日白河院
小倉花

水鏡一小書一海一名目一所一為一記一也

心誠意一

久我為政

山嶺もさき。おれは道にたふさふさふりて家

家行合し雲間花といふは

ゆき 亦開日

ぬふとも雲といひてさる砂のなみち極色うり

開日矣

まぬふれ極までわけきふまういふの風

曲侍因子

こぬまいたもみ山極にありさるうり白雲

中言がね

うえくふるいふ雲のあふまういふさる山極

又染年廿河内屏風

後徳大寺なる

花さるわきうりさる我宿をさるいふ山極

家より首より下でゆきふ

後京極權政前太政大臣

まふかにれ極とさるさる雲とさるいふ山極

清浦朝臣家小行合しゆきふ山極

後徳大寺

見しれ花のゆきとさるさる白雲とさるいふ山極

正治二年百有二年とさるさる山極

皇太后宮女史後成

雲のうらやまふ山根花よりかきとみかん

十五百番併合

正二位家隆

ふみまふも極つてかきとみかん

み野のい

新勅撰和歌集卷第二

春平下

見こふはくゆりく時りゆり

光孝天皇御製

山根よりくはまをたつてみかん

是くは 山邊の人

神ひてありに里はほかに花をふくす

貫之

あつたふとまふふいふ時をかくしにのこそあふ

源重之

禁入日あふくして為侍るも花はふ不
くしはあふくもあふくも花をわら
けでわらふ花はふくふく地をわら
けの車はふくふく地をわらふ

ふくふく

おはしにわらふふくふく花はふくふく
同御時中宮女房花はふくふくけふ日
花は春友といふ心をふくふく

信州の国信

花は春友といふ心をふくふく

にし御時島野殿より春の日地を
しるは心はふくふく

中納言貴隆

花は春友といふ心をふくふく
は生寺入道前白家より春の日地を
しるは心はふくふく

基俊

心は春友といふ心をふくふく
寛平御時より春の日地を

ふくふく

春をたのむ言はれども、
まよふ心はつねに、
延暦二年四月、
可 貫之
山田をへつるを、
左大臣藤原任能、
てつるをせしむ

大貳之位

後、
泉院の時、
大貳之位

大貳之位

建暦二年春、
大貳之位

大貳之位

大貳之位

大貳之位

大貳之位

大貳之位

大貳之位

大貳之位

大貳之位

あすこい風つなほよよふの梅はふきあも

五十首あふてまうけろよに下送目し

いづれに 後京極備後守太政大臣

あつあつと行くにむん我世(ぬ)きたの梅

開路花

逢坂の雲あふてふりんのわさよあはれなめ白

題いん 西上法師

風あふたふし散るあてにうらうらふ心川の

あふたふし散るあてにうらうらふ心川の

権中記言と云

去風吹まふちあふたふし散るあてにうらうらふ心川の

前開白家評合よ雲間花といふに云ふ

ゆき 右末持為家

去風吹まふちあふたふし散るあてにうらうらふ心川の

友原隆祐

あつあつと行くにむん我世(ぬ)きたの梅

中宮仙馬

あつあつと行くにむん我世(ぬ)きたの梅

建暦二年八月の夜ふしとて三首あ

つとまうけろよ

大綱言定通

わろさねとてきね極なりうのゆひよふてふ

太宰人貳重家ふ合しゆり

花とよみれ 源師光

極なりいふをいふとてふもあそやせつこ

歎志ふ 徳倉右左

いふもいふわきまをいふとてふもあそやせつこ

内々

ともいふ極なりあうつとてふもあそやせつこ

赤議雅定

去る月も在明なふとてふもあそやせつこ

右原行徳朝臣

うろつとてふもあそやせつこ

藤原信實朝臣

山極なりうの時^{なり}まは金てようひとむのりふふり

殿内門院大輔

さうはふとてふもあそやせつこ

花とよみれ

前入僧正慈円

花とよみれ

おびろり重しとてぬふれ我とし宿のまじき

後京極權政家^の子^は太政大臣

をさし家^の庭よりうひて雲ふ多くとてあは

ふ砂の^の花はまふれ^のなり^のまひ^の

建保六年内裏^の侍合^し春^の子

入道^の太政大臣

うねひ^のふり^のまふ^の集^の月^の金^のさ^の文^の世^の

是^のし^の

権^の人^の酒^の云^の實^の

あつ

山^の極^のま^のふ^のさ^のみ^のく^の可^のに^の花^のそ^のあ^のろ

後京極權政家^の子^は今^の小^の逢^の日^のと^の人

竹^のろ

後京極權政家^の子^は今^の小^の逢^の日^のと^の人

に^のえ^のも^のり^のて^の人^のさ^のく^の河^の院^の御^の時^のあ^のさ^のま^のの^のこ^のす^のふ^のさ^のろ

河^の院^の御^の時^のあ^のさ^のま^のの^のこ^のす^のふ^のさ^のろ

は^のく^の枝^のふ^のま^のさ^のと^のい^のろ^のて^のさ^ので^の花^のり^のろ

を^のと^のて^の花^のり^のろ

同防内侍

い^のろ^のろ^の雲^の升^のた^のむ^のら^のり^のて^のま^のろ^のま^のろ^のと^の如^のふ

ろ^のろ^の

寛政元年^の女^の御^の内^の屏^の風^の海^の老^のの^の細^のい^のく

可^の

正^の位^の家^の隆^の

浪^の風^のも^のい^のろ^のせ^のる^のま^のい^のあ^のいて^のあ^のこ^のれ^の海^の人^のさ^の如^のそ

か^のこ

ことふしてゆくらに去る山をふりてふみ
ゆくら

中院侍従

雲井も成ふく春の霞ふりかて行くやねん
歳時春尚少といふ心はゆきゆくら

大江千里

三月十五日のときとてふもつねふすあき
十五百番侍合

二條院讃岐

其のちうに経はふて八都丸島をふりて
去のふりて入道前太政大臣

まゝまふくたは跡もなし孫生の月うかふあき

亭子院方合

母之

おぬもあやしたのもを極たふてぬと我もふは
参議頭實家方合

よとふす

見ぬふりかてはあきその里の山吹のふれ
故に歎きといれはゆきゆくら

皇太后宮女俊成

あやふしといれは川をよるの山吹ふすけり

題詞

逸念古大尺

まもろしきもの思ふふとけりてさく川せの歌をのり

言ふれん

入道三宗親王通助

わかれあふえんを成ねのな明言かといふ花の面を
たかろかふおとわろ宿ふゆりふあふ池の若波

あふ花といふに成ふにけり

後頼朝

あふといふ方のうゝ系ふ袖うきて系ふはう神事といふ

五十首あふなり

嘉陽院越前

吉野河院といふる友のたもとりてあふにけり

百首予春

亦解白

きけふはまふといふいともあふかふの池の若波

家子百首あふなりけり言ふ

美田たか

かきまろあふれりけり我といふもあふなり

田大尺

ふのこと惜じふもあふたふれまろあふ

久安百首あふなりけり時之月盡す

皇太后宮寺後成

心も我の袖を引きて去るなりや
うゝんふふ

新勅撰和歌集卷第三

夏奇

是より次 相換

あふ山歌ふさへり此とまゝにいふはなれぬ

二條太皇太后宮女貳

夏衣地をうさふるも山郭といふにせま

なるゝ光るあそしゆら

二條院皇太后宮常陸

ふさふのけしきも郭といふもいふはなれぬ

家百さふふ有夏る心成しゆら

白河院御時うめよこもきほひを
此方よりわやうに流るるうふ花梅
わてとまじたりけうんこやせうふ
とてふんゆき 源師賢朝臣
郭ふひつふ屋とて花梅をふふて
也 康資王母
ふき花梅宿ねるもやま花ゆふん
久安百首ふなりうなま

大炊御門右大臣

はつふも松山郭ふよまねてとねる

皇太后宮女俊成

はぬふある宿もやま花梅とほまてとねる
十そふてふりけう時

右束縛云々

はぬふも郭ふより木の丸ぬととねる
文治六年四月入内屏風

後述大寺など

時島雲のうめひてとねる
寛喜元年十一月女御入内屏風郭ふ
とてふりけう 右束縛の家

あき日たむしき縄をけりけりけりけりけりけり
故つ郭とていれん浅きとゆふ

権中納言長方

あき日たむしき縄をけりけりけりけりけり
後法性寺入道亦開白くあき日たむしき
けりけりけりけりけりけりけりけり

皇太后宮女後成

あき日たむしき縄をけりけりけりけりけり
あき日たむしき縄をけりけりけりけりけり

後法大寺た大に

あき日たむしき縄をけりけりけりけりけり

六條通亦太政大臣

あき日たむしき縄をけりけりけりけりけり

亦右近中将資盛

あき日たむしき縄をけりけりけりけりけり

た出中物と後

あき日たむしき縄をけりけりけりけりけり

源家長初に

あき日たむしき縄をけりけりけりけりけり

あき日たむしき縄をけりけりけりけりけり

河院時后のきとて国五月郭と
えん成りしゆらう

権中紙言り時

雲初より唱つても屋寸町をねみろく元成り

後頼朝氏

屋より又きき元し郭とて月ふしとてより

ひし次

寛盛は時

みか月をさしけく金ふらうきなりし下後

し人き次

羊ふらうあきう宿り灯のほきしぬる安あり

家より力十首ありみゆらうよに安

今二京親王通也

志くあつ玉のきれしに秋せらくし安

参議雅経

難ゆききもく大れおたつふふりてもし安

法成寺入道前橋政家方合り

系主補親

夜ふきの雲初遠くぬるあきつふ月けりき

夏月よりぬらう

正三位顯家

秋もすゝ金さるる水すゝに月も夜もよそよ

心一欠

如歌に呼

らん

明やう木間もさる月影もさるすれ様の月影

石山にて眺いそへなくときて

板原 實方御氏

系と云ふか山はけや田方わらもさぬ調の心

寛喜えさ女御入月屏風杜邊山井

流水あれこころ

正之位知家

夕暮の夜もさる月影もさる杜の陰を涼き

海邊松下りし細涼の所

正之位家隆

夜衣着ても涼持らうの心もさるる

みづ月もさる心もさるる

後京極松原前太政大臣

んやとせうの心もさるる

寛喜えさ女御入月屏風

新開白

吉野川もさるる心もさるる

正之位家隆

風うきあしと川のさきふきさきなる

これより

新勅撰和歌集巻第四

秋哥上

初秋の心をしめしめ

曾祢好忠

ふるさきの心はあはれふきさき秋の心

大納言氏

うきさきの心はあはれふきさき秋の心

大納言氏

あはれふきさきの心はあはれふきさき秋の心

しきり

西行法師

おふく病いふまで我病の事候は秋の心

正二位家隆

くもゆい元多たふあふおふか秋の初風

右清経為家

とそそいふ吹ぬ我病の秋のうそ秋の初風

うめをうこも初秋の心をつうまうけ

右原資季

とそそいふ吹ぬ我病の秋のうそ秋の初風

家は百そ平よこゆううそ秋の心と

開自太良

おふく病いふまで我病の事候は秋の心

開自太良

とそそいふ吹ぬ我病の秋のうそ秋の初風

右原信實

くもゆい元多たふあふおふか秋の初風

十五百番

正秋門院丹後

とそそいふ吹ぬ我病の秋のうそ秋の初風

法住寺入道藤原中納言中將

時山家又秋といふん秋よせゆうふ

菅原在良初に

山里の萬の葉と吹也と風のうれは秋と云ふ
殿の門院大輔之福社とて五^{十一}の夕人
よよとやゆふは秋の夕

土御門大に

秋と云ふもなむ何れももさるる冬とこ
むと云ふ
曾孫好忠

徳念老大に

極めさるる風の思と云ふさるる秋の初
夕暮の秋とすたまたた危とのさる秋の初
夕暮

殿の門院大輔

いささの思と云ふは秋の思と云ふに秋風を思
うきと云ふは秋の思と云ふに秋風を思
法中猷

崇徳院に

天のうきと云ふは秋の思と云ふに秋風を思
百と云ふは秋の思と云ふに秋風を思

あはれに八十の思と云ふは秋の思と云ふに秋風を思
清輔の思と云ふは秋の思と云ふに秋風を思
ん成の思と云ふは秋の思と云ふに秋風を思
友原敦仲

銀河きつる原はいに星をまじりて舟にやみ懸る
後之條院河うらふとのこも亦院と
七夕すもいゆふり

赤中細言基長

なつともあふ七夕あふと一と秋とにそ
沈むち入道前開白家と七夕のん成
もいゆふり 菅原在良羽に

天の星合もみゆり、他をうてそ秋の秋

宇治入道前開白家と七夕あふり

けう

恒人細言恒補

織女つるもあふり、他をうてそ秋の秋
百そあふり、他をうてそ秋の秋

正三位家隆

あふり、他をうてそ秋の秋
七夕後羽心をうてそ秋の秋

恒中細言恒實

織女のはけけけけけけけけけけけけけけけけ
菅原清輔の
あふり、他をうてそ秋の秋

八条院高倉

しるもまゝいさしる秋風も七つめや袖ぬえん

兼大納言陸房

まゝ秋の一夜を結えりゆり寝かき星の光

百有平中ち 中子内親王

秋の宵物とうふ山ろふふさふ雲の夕言の光

二條院讃岐

今も此秋の将えといふも萩の葉あそびはな ゆき

秋のうさぎとてふるゆき

入道二宗親王通助

萩の葉は風のよとあはれ秋もあはれ葉のふさふさ

入道前太政大臣

萩の葉もは吹ぬる秋風の海を渡る夕言を

むさし 相摸

ふさそゆきふさふさ秋のふさふさの雲の光

大納言師氏

白萩の葉もふさふさ秋の夜を渡る夕言を

秋のふさふさの雲の光

たも中将公衡

ふさふさの雲の光を渡りてふさふさの雲の光

友原教雅の

秋とて後ふふせん浅茅とに秋とて人成ね虫の
うのなるこゝし隣を秋といふ人をうけ
まづうらやう
栢中納言隆親

柿の宿の垣あはれていかに庭が秋萩の
しきとて
うらやま

あすも秋のいづし出す萩の紅葉ふうつ萩ぎ
ころしの秋風をこ萩の花にすす白あをたふし
あすの川ゆきとせの秋萩ふふはるふらうと
あん

柿廿八丸

白萩と秋のもともなきまててゆく事かた我必

祐子内親王家小井

さきく秋のちありとやきれりあはれ萩花に
白河院とて野草萩花といつる心をのこ
しとていづまううたれよ

大蔵行宗

かり萩の花とてあはれうらうつる色ふそかりり
家小秋のふとせのうらやま

鎌倉右大臣

道れふもの夕暮の地ふとてよもみ萩萩の
秋のあはれ小萩うつるふらうかまはれ
あん

有原基徳

あまのふり萩原咲くも物立座なるぬい

雲岳寺懐西上人の食のゆかり

信仲綱吉師時

物立座なるもさ萩原なるぬいのさき

信仲綱吉師時合のゆかり

けうくわ 棟敷役通

女房もさきいなりしもあかりききなる秋

むさす 二條元續波

あつきの様もさき女房記性や世小流けり

菅家万葉集の歌人さき

若にむさきてふれ女房もさきなる秋

式部教慶の家の小人のゆかり

あそひなりてゆかり女房もさき

ふしゆき 三條右大臣

女房もさきふり白雲はじけふふあなほ

久安百首のさき

左京大夫頼朝

わさきさきそりやふなるぬいのさき

むさす 信仲綱吉長方

ひさかり

さへいふてはふらふたすはまのそへいふては

泰誠雅臣

花もさきまの袂はうそも涙も流るゝに下は

源具親

いふさきの袂もたすき涙もあふれ秋はさき

閑庭薄雲の秋はさき

藤原信實

まねてさうへいふてはふらふたすはまのそへいふては

閑庭萩とふれ

友原成宗

ふ秋の風の屋をさきふれ秋の風の萩を

是ふては

前大僧正

わうちあふて秋とふれさきふれ秋とふれ萩を

ふては

はらふてはふらふたすはまのそへいふては

月あはれふらふたすはまのそへいふては

後京極院前太政大臣

白雲のふらふたすはまのそへいふては

権中納言経定中將よりふらふたすはまのそへいふては

はらふてはふらふたすはまのそへいふては

大炊御門右大臣

あつたうへに雲々、秋風ふくむくもあつた

延喜

正三位家隆

月

文級やとていふもねも月をみてあつた

延喜御時八月十五日

源忠朝に

いづもあつたとうと秋の風の月をみてあつた

養和のふりい

秋

権中納言定家

河上原中(かとうらふ)秋とて月をみてあつた

家も首あつた

開白た大に

あつたの風ふくむて秋の風の月

月あつた

藤原資季羽に

あつたにふくむてあつたの風の月

八月十五日

麻起法師

あつたにふくむてあつたの風の月

登蓮法師

あ

かう秋の中いさめりける今暫くは月を
後京極攝政左大臣の御時月廿
そのとてはるるまゝ

信仲細言定家

ねん秋の中いさめりける今暫くは月を
月廿よりはるるまゝ

左近中将基良

山端のつはえりやあらん雲よりあふる月を

信律師公猷

づくもえはるるまゝあらん雲よりあふる月を

中原師季

待てどもいさめりける今暫くは月を

真昭法師

袖の中いさめりける今暫くは月を

開白左大臣家白よりあふる月を

月廿 藤原頼氏御

わさめりける今暫くは月を

入道二親王家よりあふる月を

ゆき山家川

正三位家隆

松戸をよめるの風は雲もからぬ月をみず

文法をきき中内屏風は約述の所

後京極攝政の太政大臣

あつてもふ相持の越えぬとも望月を約

和ふふ行合も海を秋月といふこと

よとゆふふ 小侍候

松戸をよめる海はふと波のうらもふと秋の月

百首年々月々

新刊白

しやうきやうちうちとて山風ふと月を

うのむこも海を月といふこと

まつりふとていふこと

御製

松戸をよめるの風は雲もからぬ月をみず

秋をよめるまつりふとていふこと

正三位家隆

もふ海をよめる風は雲もからぬ月をみず

名所月をよめる

藤原光俊卿

明石の海をよめる風は雲もからぬ月をみず

白河院島羽殿おはるゝまゝは田家

杖興といふんことのこゝろまづけ

権大納言宗通

志はつたの田の稲のかりまきてあそもふと

ひまゝ

藤原通信朝に

おどろけお宿成方こゝろまづけ

亦大僧正慈円

おどろけお宿成方こゝろまづけ

おどろけお宿成方こゝろまづけ

海老方といふと浅

正三位志家

おどろけお宿成方こゝろまづけ

ひまゝ

正三位志家

おどろけお宿成方こゝろまづけ

西行法師

おどろけお宿成方こゝろまづけ

おどろけお宿成方こゝろまづけ

新勅撰和歌集卷第五

秋夕下

寛平御時きさうきの侍合

読人吉良

秋の夜より月をみよと白雲をよとて

九月十二日秋の月成徳をめでていふ

能因法師

文段とておほめ様祈りておほめ月成徳をうめ

小野小町

秋の月よりおほめをうめとていふ

九月にきあらに秋の月をうめ

選子内親王家宰相

秋の夜の露をみよとて秋の月をうめ

くゆる月成徳をうめとていふ

道信朝臣

いとおくからぬ秋の月をうめとていふ

對月指秋といふ心成徳をうめ

菅原在良朝臣

月成徳をうめとていふ秋の

秋の月をうめとていふ

侍従具定母

うき世は秋の末葉の露の力もなきふに袖の月

按察使兼京

在明の月の光のやうに空を照らす

左近中将侍平

こゝろ下を照してとくあかき同月の新うき

百首中

後京極攝政の太政大臣

真珠のうてゑの明の月をいくつとてふ

建保二年秋のうてゑの月

参議雅恒

身も秋のやうにせうとてあかき月をいくつとてふ

正三位家隆

限あまの明の月とすう清の月とてふ

入る二匹親王家とて秋の月

ゆき

権大僧都有果

風をいづ月をえうとてけうとてあかき月

後京極攝政家百首中

小侍従

いづる月をいづれとてあかき月

八條院六条

秋の夜は静寂なりていそぎをなすは神

秋の夜は静寂なりていそぎをなすは神

ゆけり

京極前関白家肥後

秋の夜は静寂なりていそぎをなすは神

うらやまのことも秋十そきはるる

うらやま

右忠門傳為家

片思の杜の木ももたぬは思のやうなやう

寛平御時辰のまじりて今

よと人志ん

うらやまのことも秋十そきはるる

うらやま

人凡

秋田のいふやうに秋十そきはるる

躬恒

秋の夜は静寂なりていそぎをなすは神

兵部卿え良のみにていそぎをなすは神

時がふすは家城をふまうて

うらやまのことも秋十そきはるる

うらやまのことも秋十そきはるる

うらやま

中納言家持

秋の夜は静寂なりていそぎをなすは神

徳倉右大臣

雲乃から松乃ふ雲かこめてうれふ麻そのり

前大僧正慈円

じーとよの此物ちよをれ秋なりきう内みあ

詩合しゆくふ麻とよとゆく

前系儀経盛

等ふく麻の初ちくちやるりねあかめあ

建保六年四月表あ合秋奇

八條院高倉

わろ唐はとれ心あうく通色は世とさうとるあ

麻あとしてふゆく

権中納言實守

にほ山遠ふとろ麻の初くちとよとて妻と

建保五年四月度申五とろ秋初

六条入る前大政大臣

にやうとれを氣とりく麻は後なりは也の物あ

洞を麻といつては成すゆく

正三位知家

いれみ初極くきりね水新ふみぬ妻とよ

むきく

水原法師

所蔵の書もつゞく文より風の後の山のとて
 後奈良院元この言とヤク時梨壺
 のおまゝの菊にせりりくは月あき
 いとにけせうとくは

大貳三位

いづれもわきてあきし月夜をみまふ白菊を
初ままりてゆゑよこ家のやうに
うまひを食ふにやせれど進みよと
ゆゑ

檀大細書長家

檀大綱書長家

月新抄
康保三年
内裏菊合

康保三年丙辰菊令

天曆中

新みて汀より白菊はるまね浪の心とて
崇徳院月照菊花といふ心とて
世行く心とて
古来の心とて

世経うろよ

古本傳云

月氣は冬もわづなぬ白菊の心あてをそむる命なり
梅家不使ふ通

按察使公通

月新もろくはる月之丘よてふあまのいぬ白菊
月新菊といふらんをよしゆらん

月並菊とつらん
とよしゆ
漁金方人

ねまてはる袖の月影ふくむ 龍の菊の光のこの

部一六 入道二示親王の助

わが宿の菊の御影ふくむにふくむる秋の秋風

秋のふくむる秋

権大納言忠信

なごもめでたき初なる後のみはさるるをさ

謙金おと

和田の原屋のきけりよふる秋の秋風

如礼法師

月にさるる秋のふくむる秋の秋風

真眼法師

めく吹遠むるの秋の秋風

持ねる心をふくむる

苗村好忠

秋の秋風とふくむる秋の秋風

貫之

く秋の秋風とふくむる秋の秋風

久安の秋風

皇太后文政後成

ねういはいはる秋の秋風

百そふきてまつる秋分

道前大政大臣

風をさかす秋分のことふが道てまじり

権大納言陸房

今んとあかしふる月をさくれあし

むきふ 兼明院小宰相

月をさく秋分はつるあしとさく

月廿首あふみゆふ

後東極權正前大臣

いさし秋分はつるあしとさく

秋分はつるあしとさく

権大納言家良

秋分はつるあしとさく

正三位家隆

秋分はつるあしとさく

建保六年内裏侍合秋分

秋分はつるあしとさく

秋分はつるあしとさく

秋分

秋分はつるあしとさく

十百番詩合

正三位家隆

秋の風吹ぬさへ外山なるは来のふきまはる

むね

藤原信實卿に

日減るては秋風をこころのふりしきも

百首あてまつるは秋の

入道兼大納言大臣

秋の父のつらひ極み浅限にて神小町あはれ

糸議経経

秋のやゆいの浅茅うぐれてはあはれなる

むね

道倉右大臣

雁鳴てはじふの霜を霜よりの神小町あはれ

西行法師

山雲の秋の末をさる秋れつるを木枯る風

かきあはれしつゝ父のまゝきし何子きくるを小倉山

友原伊光

紅の角は雲の紅きとふ海よとねるる人

建保二年秋あてまつるは

内大臣

湊川秋の水の父ういふあはれなる時あはれ

系議雅徑

華夷のやまといふあぬふの瑞龍田のふりてん

僧正行意

わが宿りたる山紅葉は胡蝶の麻の跡をい

後法住寺入道藤原朝白家行合み紅葉

とよとゆふ 皇太后宮女俊成

ふれとふふあつと紅葉は秋のふれぬとふふ

百首のふれ中

式子に親し

秋とあふふあぬねのふれいふとふふの紅葉

開白たふた家百首のふれ中

権中納言定家

ふれとふふあぬねのふれいふとふふの紅葉

後三位頼宗

秋のふれとふふあぬねのふれいふとふふの紅葉

中宮健馬

ふれとふふあぬねのふれいふとふふの紅葉

うふふのふれとふふあぬねのふれいふとふふの紅葉

権中納言隆親

ふれとふふあぬねのふれいふとふふの紅葉

元一 法平寛寛

後保元四年右大臣家行合村紅葉と

正三位家隆

文治六年女御入内屏風

後法性寺入道兼実白太政大臣

後法性寺入道兼実白太政大臣

後法性寺入道兼実白太政大臣

左京太政大臣

中納言經忠

中納言經忠

家白太大臣

小侍従

小侍従

後京極權上

後京極權上

後京極權上

後京極權上

秋の日のあけ

禎子に親王家備津

想く好のまゝいふのおきりやあはれん

杉中記言實有

木村のさそひてうお葉を何せの秋と詠をうん

糸議將經

秋をふくれを升る龍田河想くせの原も冬より見

九月盡まよふゆゑ

入道亦太政大臣

阿そりとの石浦をふかかなまゆひもこね秋の

八條院高倉

色そてぬうつなう月若れきてるう

秋の日のあけ

九月盡日伊勢大備よりまつる

糸議將經

色つるふとていふはまらきふえりなる秋の言

也

伊勢大備

あはれ言ゆる秋の日はいたなりあはれ

光り波うら

ゆるして紅葉浮水とて心成すもゆらぐ

中ねのゆらぐ時 右近大納通房

水う面ふかきふれふれお葉を流とてうら

九條大納大臣

大井のうふ紅葉の葉と浪の心まててや

後次泉院御時殿上道達よなまし

よとゆらぐ 中納言資經

もみり葉のさきもやうね大井のうらやの葉

白河院御時うらやのこも 月並所葉と

いふ心成すもゆらぐ

梅後堀河臣

久方月をわらふ木村はさくらぬお葉のり

入道二平親王通助

おしお葉吹く庭の面小葉もゆらぬ秋の

白土百番河合

大蔵卿有家

おとねも今ハ枯れてねまひく風そくく

建保五年内裏衣合はあふ霜

正三位家隆

かきあふのわさくさくさあふ雲升ふあふ雪の

冬
開月

藤原信實別氏

も夏の雨は秋とてぬきもする霜の月か
法性寺入る前開自見大なる時家

方介

檀中烟云呼俊

病にもお薬の効くはるまで待つてや菊おつるん

延喜十二年十月以前

に菊うゑでいあうひゆきそまよふ

四
行
子
子

延壽印

水は新をいせり菊の花はつらよそをみよ

忠行臣

とく我は父後子うけつたむと云ふをうん

星よそへ
けふ月夜
或るは
いそり

三

東山院小石

やうくするはきしふまゝの時分がらん

也

策武部

大と云ふ此の時ありて云ふあはれと云ふじつに神ぞくまふ
心作の時といふ心は浅く見えゆ

心作時といふ心は心作の時

源市賢相臣

袖ぬすむる多し神名月伊勢のふくろし
云

之奇よと傳ふ小

右木門傳為家

冬きてりきくくきく絶りふ家木家のあけ日

正三位家

時ぬみぬきぬききもきりきりきりきりきりきり

法性入道并開白家あふ

源兼昌

夕きりきりきりきりきりきりきりきりきり

お参議恒盛信合一ゆき

友原云重朝に

ふきりきりきりきりきりきりきりきりきり

平恒正朝に

ひきりきりきりきりきりきりきりきりきり

建保三年内裏あふ

亦内氏

秋月きりきりきりきりきりきりきりきり

題きり

亦大信正慈因

と山木あきりきりきりきりきりきりきり

月と心秋の若きりきりきりきりきりきり

亦大綱云忠良

秋きりきりきりきりきりきりきりきりきり

殷富の境人備

文とじこち道てにうつ白とく程きく程林の

正之位家臣

故うを同親もいふれく相の落葉とあふ

十丑百番伝合

久とくすうづつ果れふあ吹まふ山あり

百とく方より約多れみい

兵部つ成實

こもねあふあふうけとまの目れ明る

建保四年百とくあの中とく

亦開白

衆とく龍川保とくして花れいあねを

或子内親王

吹流小龍とく小龍とくして花れいあねを

昔は龍とくあふあふあふあふあふあふ

関白とく家百とくあふあふあふあふ

中宮但馬

関白とく家百とくあふあふあふあふあふ

西の神

風とてすまふあふあふあふあふあふあふ

寛喜元年八月廿八日屏風湖邊抄佐

内大臣

三浦の浦のいづれかの舟に宿も道あり世とや

千五百番候合

匡秋門院丹後

そのおとあまきつるきにたはして雲の流るふに

二條院讃岐

うらけをてをいへるももたふしはありきる在明の

久安百そふりけり時を云

皇太子宮人後成

月津の島にふりておつて風をけり浦の明方の

千島とよんけり

権中納言國信

友千島しきてふきふにふりあり仲りき例はあや

源頭國朝臣

風をき難けり浦のそとをききふにけり立飛

千五百番候合

源具親朝臣

こねるき湊吹に風をけり浦のそとをききふに

鎌倉在在

風をこゝろにたてしうきよき人の浦にちかき
寛政元年廿四日屏風山野芳朝

前関白

手しに保んもあらまてたう色成しうき

内大臣

めくは年めう世のきけりもや equal 山まつり

起る人

権中納言長方

お鴻やううおがうもしてあし累ふき ちん

ち木ふふふ人おが か 松原松ふき う

正三位家隆

めう海やこの松山跡絶てわもき う 松ふき

賀茂重政

き向松原 は もき は 松ふきの う 松ふき

高野よりゆふ は 麻然法師大原より

侍 う 松ふき う

西行法師

に は 松ふきの う 松ふきの う 松ふきの う

起る人

刑部左衛門

玉張 う 松ふきの う 松ふきの う 松ふきの う

清浦朝臣

雲井りあふるきくく井川のりしをよめん
百首あふきき

亦開白

いふ人のいふもあふるきくく井川のりしをよめん
関白たて

し女子の袖あふるきくく井川のりしをよめん
冬月減りたる

左京大夫頭

雪あふるきくく井川のりしをよめん
そふとてふみけり

後京極殿前太政大臣

いひあふるきくく井川のりしをよめん
あふるきくく井川のりしをよめん
鎌倉太政大臣

正二位家隆

明のりあふるきくく井川のりしをよめん
建保五年丙寅詔令を海雪

八束院高倉

雪あふるきくく井川のりしをよめん
雪あふるきくく井川のりしをよめん

心三位家隆

わかれやせぬ心くさるるあきうはふ
ち陽院家信合

康資王母

あみけらにみ跡はけきわのうあきうはふ
心くさるるあきうはふ

ちやうくはくしあきの葉雪うきうはふ

源のほかきうはふ

基俊

くさるるあきうはふ

建保六年日表詩合

入る前太政大臣

瓜あきうはふ

泰議雅経

あきうはふ

関白たか家

あきうはふ

あきうはふ

古溪雪

中宮大史通方

百歳の人をいじめるは去年よりいふやうに

母の

あつたやうにうらやまをいふやうに

うらやま

新勅撰和歌集巻第七

賀奇

貞永元年六月廿二日の御方とて

けりて鶴岡の年といふを海也

うきものよ 前関白

鶴岡の子の文庫の末のうきものよと我々

関白の文

久方しう、鶴岡の文庫の末のうきものよ

寛治八年八月、陽院家、安合

月、

国防内侍

つねよりともくはる山月影の光りけふ天の下に

祝ふ心誠より 藤原行家朝臣

あめれたくは世のまがしめみれ山の林をて

百首よりまよふ世のつれなき時祝ふ

後には僧寺なる所実なる

半世へん君よりまよふ玉桂系よりまよふ経は定む

太宰大貳重家

ひる田いじきわらうつる世もふ君より歎小きうと思

堀川院の時竹不改色といふ心成す也

行うるふ 馬家入道前開白太鼓

色うねつるふふふふふ世もふふふふふふふふふ

長徳五年た大に家を合し

友原長能

若きころとせはねのう緑はみ水ぬれをみり

是より 實方朝臣

枝々すき日る糸の糸小ねの心と糸をきねん

天徳二年右大臣中平院屏風より

清原元輔

わらふる世のふりといふはははははははははははは

勅使より斎宮中へいりて談ひる

中納言兼輔

皇初の初に君をよとせしむる
一平康子内親王をさけり

忠臣

天曆御時人きちぬふり
天曆御時人きちぬふり

中納言朝忠

長元六年開白鳥川子日
長元六年開白鳥川子日

中納言朝基

永治二年崇徳院橋政の法性寺
永治二年崇徳院橋政の法性寺

大炊御門大良

後白河院御時や
後白河院御時や

信中納言長方

非但や政のねとらんふとせむのうとやみ
仁安三年攝政院の家と對仁年
敷とふ心なふんゆり

信中納言兼光

うーふねの縁も若色もふとせむのねがれ
建仁三年正月に有春色とふ
心成ふのうもはつてけり

亦左大臣

常盤から玉ねえもまふれはせのまふみきふ

いのうはつてふとせむのうとやみ

信人僧都良年

あてふいあふてふね我君のまふとせむ
元うりまふれはせふふんゆり

入道亦左大臣

春分つ子月ねあふとせむのうとやみ

天長四年国三月中殿小殿新感

極花寺

堀河右大臣

ふそんねまふとせむのうとやみ

信人納言信家

つねより春ものや花若きふらぬやれ花を
寛政元年十一月廿四日屏風末美
人家え日つこころふ

亦関白

と書花のきこにねとうて民のたふろきそ
江山人家柳あふふ

入道亦太政大臣

若しはくそくや河の玉柳入江の流ふ舟橋を

池多ふ花

正之位家

去日る花の陰色ふふあふふはく客と池

二月山田子苗 内大臣

と田屋をりてはくまふふはくふ世に教はる我

左のあ

八月山野小麻ふてふふ

亦関白

今そこまめりひふ春日のさかふふ一柳の

人家蛸月

わき宿り光城えても雲はの月とそめふれ

とれ

田家西収興

うへは秋のふもあふふはくふふ一民のふね

日そあふ

入道亦太政大臣

秋とて君の歎けふは國の秋もさう
田舎院中時中將と仰と暮はるる
是てまをわさにあるものこよまいて
弘徽殿よとてまうてはるる

小野宮右大臣

あせり秋と約つちるるは君がふしはね松雲の夢
九月九日從一位倫子菊のけいと約て
元月いすてよと約るまは

は宗武部

菊のあけのけりも袖ぬきて花のあけにせはる

菊とよみ約るる元月

わが室の菊の白露よりいせ秋のさきにをさる
こそめ

康資王母

なご月小菊いさめり菊が道におもいさるる
後次泉院中時中將菊映水とらるる
人こそはるるまはるる

権大細言長家

秋月のるは白菊いさるるは秋のさきにをさる

兼保三子大井川よりあけのけり

さるる

大宮右大臣

同日基の風作ありやい

権中納言頼資

あふる玉松をせすともいふやうにあり

御屏風ありてい

是の日の目録なりとて御のふりかへん

是よりいふらん

月日もあつたもいふらんといふは心のこころ

延喜六年の日に竟宴の宴国天皇

西三條右大臣

あつたもいふらんといふは心のこころ

豊河食炊屋娘天皇

貞徳

いふらんといふは心のこころ

天保十八年正月あつたいふらん

朝人にきくらけいふらん

中宮の院ふまゝてあつたいふらん

いふらんといふは心のこころ

奏し給ふ

廿年九月

あつたもいふらんといふは心のこころ

あつた

右大臣の佐保の家母のゆきせを

行けり日

聖武天皇御製

あはれなるまことの公をめでとてさるる

おぼしめし

新勅撰和歌集巻第八

羈旅奇

太宰師小侍多時府食らひきりて香

推浦はあそひゆくるふよめ

大納言様人

はやに思ひしるに白糸の袖をぬきてあはれ

越中守はゆくる時ふのつはあせの水

うんふあそひゆくる時ふ

中納言家持

あせの海のおきつ白糸の袖をぬきてあはれ

あすうしは御時あにふゆさゆら母

ふゆら 額田王

秋うふむるもあにやまはし宮のきよなるが

吉野宮ふゆにゆら母

持統天皇御製

えふれふ下風のきくふらやふしも我独祈ん

慶雲三年ふふれ宮にゆら母

田原天皇御製

芦花の羽ひふあうてききふあふとふ

ふあふ かん人

ふふあふ屋をせんふあふあうふあふこの日

くあふもあふあふあふあふのけふに家もあふ

并基注

まはらふあふあふあふあふあふあふあふあふ

幸子院宮御覧におけふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふ

かん人 大綱書

いふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

うあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

謙注

しんとうめいひてさうふいふ死あゝまゝ
にけりぬるういふあゝまゝゆゑ

惠慶江印

都をさくひかくたふしあゝまゝ死あゝまゝ

藤原惟親、越後へよりゆゑふけり

み 仲男大輔

ふやうふん様衣あゝまゝ死あゝまゝ

む 和泉式部

ふやうふん様衣あゝまゝ死あゝまゝ

ふやうふん様衣あゝまゝ死あゝまゝ

敦原清正

ふやうふん様衣あゝまゝ死あゝまゝ

左京太政大臣

ふやうふん様衣あゝまゝ死あゝまゝ

通国法師

ふやうふん様衣あゝまゝ死あゝまゝ

入道前太政大臣

ふやうふん様衣あゝまゝ死あゝまゝ

ふやうふん様衣あゝまゝ死あゝまゝ

別ふん様衣あゝまゝ死あゝまゝ

源家長卿

あはれと明と真木の子とるにふはる

荻原親純

わきゆきもさめは清水逢坂の石のより

土佐國より（ゆき時ふはる）

ゆき

藤原兼高

曉そけき物とて秋より言に誠なりぬのえ

権大納言忠佐の合（ゆき）小猿恋と

ゆき

友原信實卿

ふはるといふ別と曉とつむきとて一猿のえ

猿をそよる

前中納言匡房

もまぬ猿なりとあふるゆき、藤原ふとい

宇治川白あふる此湯あふる、まるとる

なりて情秋言ふらんゆき

権大納言長家

秋の杜のゆきと宿は通言に秋もゆきとる

舟を群行ゆきと頼きとて猿の

あふらんゆき

権中納言通俊

いせくともふとすむ猿のすくきなり藤原

あふる

開跡曉雪といふ人哉と見ゆ

権大納言言雲實

鳥のいぬとまを八様衣といふ人実物
久安百そあそまうろく様の手

皇太后宣太史俊成

我ふふんせんやうふすといふ人の名を
るるの若き金の手りきもいふ後初らきなり
後には入道前開白お百そあそま
ゆろに様いふといふてつていふ

後述太ちた大長

まねしとふ後初らきといふは様の元と出
百首歌なけり時

後京極攝政太政官

うまねしとふもいふのうらぬといふとあそま
こす

孝内親王

いふ成りまものこふと様とて我う初とあ
ふ

源師光

ては月のみらゆきあうまといふは様の目板とあ
う

是とて 鎌倉右大臣

世中いふふもいふはあそまといふはあそま
あそま

入道二京親王家より卒首よりんゆり

海様

江中幸法

言ぬとてとまりいふ夕原ふと南なるきつれ
旅泊る心をよりんゆり

信中代言頼資

秋よりうき秋夜つるまじと浪れまづれ
うき

正三位家

宿枕爰ふもみだり清なるささる酒とふん

旅の心はよりんゆり

氣議雅經

きつる又もや山人別雲跡もさめぬさる風

真眼法師

月の色もくはるにけりな旅れすもけの萩の

都とけふまで一町とまうてめくらゆり

いもゆり

八條院高倉

世にうしてふれ都にあめよりつる心はゆり

きつるやふるを尋ねともぬれたれやま

建曆二年丙寅詩を合輯中眺望

とて心はよりんゆり

八條入道前太政大臣

置佐東人

大伴のうねのねと松小ぬきと

家におまへ

新勅撰和歌集卷第九

神祇文

延喜六年日本記竟宴寺下照女

中納言當時

唐衣をてる女書衣をあらふきこふつふぬ

天慶六年月竟宴寺下常立尊

中納言惟時

あめりたおほひつけめ英王てききとてふ絶ぬり

月夜見尊

源公忠朝臣

月あけあけふのかりて屋もけりめと世とみきた

天兒屋根より梅仲遠

ねがふ照見光ますといにや祢のみといつゝ
神樂こつゝもの予

うふハ袖とてやまきさるのなをさしきう
らとんきあきめと梓らまゆとまきういとあも
堀河院は時をいきてきせけりう
のをれこもゆりてけとあきめ祢
かきずくゆらうと内をめそいし人
うとせけひくをいせくかんゆらう

二條院太皇太后宮大貳

あてや神より人玉のこもつてより祢を密

庚申れねがひて小女房の合

ゆらう

祢子内親王家宣

あてやふくす人無いとせぬ祢と

国二月ゆらう年斎院まきりて長官

りて女房の中ふつり

京極前関白太政大臣

春のねのこまけね祢にきめけりあえてけ

賀茂條の時をいふらんゆらう

法成寺入道前祢太政大臣

いあはかりせむいさうとておふおのともん
同いんけんけん

貫之

いあはかりせむいさうとておふおのともん
通同すめけん 廣田社行合
社以高ともけん

三條通左大臣

いあはかりせむいさうとておふおのともん
條時おの還立のいけんともけん

高部成實

いあはかりせむいさうとておふおのともん
神宗ともけん

大納言通具

いあはかりせむいさうとておふおのともん
建保三年百とておふおのともん

正五位家法

いあはかりせむいさうとておふおのともん
百首おけん

後京極院の太政大臣

いあはかりせむいさうとておふおのともん
冷康川やうせり

春日山杜下なるあまていふこゝにまゐりて
建保六年因裏綺合秋分

僧正行意

あまていふこゝにまゐりて
日吉岳跡の心をまゐりて

亦大僧正慈田

あまていふこゝにまゐりて
わが日吉岳跡の心をまゐりて
うきうきなるまゐりて
迷懷をまゐりて

我のしづみや神宮のまゐりて
社より八十間ほろりけり

禪竹のり

祝部成仲

うきうきなるまゐりて
十百番綺合

市川内大良

やまのつゆのまゐりて
あまていふこゝにまゐりて

参議雅経

うきてのうきとふくしとふくしとあまのうきと
社よりなる述懐

祝部忠成

おやいとおきとふくしとふくしとあまのうきと
是より

床延法師

紅葉のあまのうきとふくしとあまのうきと
祝の心はふくしとふくしと

賀茂重政

神の心もあまのうきとふくしとあまのうきと
述懐の心はふくしとふくしと

慈木田延成

神の心もあまのうきとふくしとあまのうきと
富士の心はふくしとふくしと

平泰時

うきとふくしとあまのうきとふくしとあまのうきと
寛喜三年の伊勢勅使とてうきとふくしと
あまのうきとふくしとあまのうきとふくしと
うきとふくしとあまのうきとふくしとあまのうきと
侍の心はふくしとふくしと

卜部筆直

天は風あり風を吹くもやめくはれは報
じふう時ありぬるはより
神樂とらんゆら

江中慶算

里うら風うふとつきてこそ神受も報
し
志慶は

名ねりありひる葉やひてふは風そいふ神

能周に子

こふふは風の葉そいふ葉もすうら

新勅撰和歌集卷第十
釋教部

土佐國を去るふ所とて

弘法大師

法性よりそをわすめぬが原風をぬき
えらする衆とよむゆかり

室也上人

有漏のちから次第あつうあつう成金そまじやう
伊勢の山のおもととてとてつとまり
ゆかりよ

大僧正行基

法月ひさしもあしあしとあふさうりきう
起るる

十親法師

法月と我ちとてせもまぬる雲のみあかり
居る戒うるゆかり

大僧正親暎

法月と我ちとてせもまぬる雲のみあかり
大僧正明尊しとてて供養の導師
とて草木成佛のうしとてゆかりをき
あふさうりき

大僧都深親

手本を以て行はせしむるは此の如くともなる

大僧正明尊

後にもふたつ程うとていふことなりともなる

錫杖のふたつとていふことなり

ふたつ輪はしめて世の仏もさばけりともなる

法成寺入道前横政家は法成經

廿八本ありていふことなり序に

檀入納言行成

じつと花の色もあふりていふことなり

五百弟子に法成寺入道前横政家は

きていふことなり世にいふことなり

廿八本のふたつとていふことなり

少僧正源信

神のふたつとていふことなり

親も院ふたつとていふことなり

少僧正 法成院太皇太后宮

ふたつとていふことなり

教心和尚集のふたつとていふことなり

選子内親王

世にもいふことなり

普賢十願諸佛住世

凡ふく光城ありて其のときもふてとせ云くは
藥王不盡之汝身

由きくは法をきくはるめ候ふも限と

百有六中より大悲代受

苦の心成 式す内親五

念地より人のつらふも成ててそのときもあきなり

待賢の院中納言人 ことめて法花經

其のふよりせゆるふ小聲を喻り其津

衆生悉是吾子なり心成

皇太后言大孝成

凡れ子なり小歎くし世中にいふは人のつらふを

随喜功德也

長らくも通れ末とらじ人もきくはるなり

義福門院在ふ時禮を結ふとせらる

ゆてくもきふはるまうる小座空

東にこしすれて親王國を所くゆて

手打つたの病ふもいひぬふ雲はく(なりて

白銀ひるもこりいふ普賢大士来座と

白妙は月をうつとていふは病はけり(なり

舍利報恩講と云ふをいふは

亦大僧正慈因

系の法統のついでに日の子に後光あり

こころの雲のついでに秋の月

金剛東の五部をよめる小佛部

しるす光もある望月と云ふは

塵點本心成るなり

わが心もついでにわが心なり

家小百のついでにわが心なり

鏡智の心と云ふは

くもりぬみふのついでにわが心なり

阿含經

友原隆信

あまのついでにわが心なり

安樂行

藤原盛方

いさゝかについでにわが心なり

法花提持

法中慶忠

法華のついでにわが心なり

紫衣部

多下

信大納言宗家

はるる我々のねんじつしにけは宗の氣の通

女八郎あふも侍る小舟量平

八條院高金

力を授く恵ぬううううけう岩よとせうねん世

陀羅尼平

あふ元雲のしりうきまうし女房婆つづねん

初翁も受持佛語作礼而去

麻然法師

りふふ勢のふもとくうしに法をせう家つとふ

薩摩王子の心証ふんゆふ

殷富門院大輔

力とせうねんきう竹葉のふふにふと出るは奴

百首のふんゆふ小十男のふ人寄

後京極院のふふにふ

夏月日けうく明言てふふえうふかふふん

美薩

秋月けうく一和のふふとつづねそめうふ

十二光佛の心をふふに不斷光仏

源孝廣

月新入山のともつかりき絶ぬえとふ果し一は
如来を色に誓ね仕へん心成より

鍍也法師

ねまねりのきふすむ月をん来はつてそ
中道親んともいふ

信生法師

ちりしとんえ小雲法くじり地跡ふる月氣
悲鳴切咽痛恋本群といふやな

麻然法師

きんえきこ萩系にがし麻とるふはふちる意

自惟孤衆の心哉

麻起法師

こいしとあしけけかき祿とて鳴鶴の林の夜と
十戒云んゆふく小不敬生戒

法眼宗因

不偷盜戒

不悭貪戒

おしとねしけけ此君も己龍田の山のね
若く小ねせぬ若くもあふきしはきし他惜し

経教の流るるに

蓮生法師

後世に於ては流るるをみざるに似たり

十如是の心法も亦るる未究

竟焉

殊然法師

小藤原あるまじく一ににせし末葉もかく

後法性入道前関白利満のついで

人十如是の心法も亦るる未究

殊る心法

後京極院前太政大臣

長祿の始めきり月日のあつても世に

如是性

二條院讃岐

とじてもさるるをみざるに似たり

大楠人十有九のすめり天王

さしてけりふもゆかり

設高門院新中納言

さめける心法も亦るる未究

大土寺のあつてもゆかり

都芳門院安房

いつなりといふも亦るる未究

光のり天正のふも亦るる未究

さし川をゆるぐれ

後白河院京極

西の海いろ日をきくふりて東のきこふ遠さ

かき人ふてふもぬきてとやう人

光明真言とくきととくとして

高井上人

つきくろ跡ふえぬやうにたふもやう

かき事ととやうととく人のきこふ

けうく

清龍やき岩ゆるぎ人もあふれ

あつ世のうさうせいにんあつ世に

住房西の音ふえあつ世に

ねあつ縄床樹とあつ世に

にて坐するにうさうあつ世に

あつ目すこいあつ世に

小ねの風をく吹くもあつ世に

あつ世にうさうあつ世に

ねあつととくあつ世に

うさうととくあつ世に

ねあつ世の若くあつ世に



